

鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽

序

横川 端

父祖が呼び寄せた大連

平成二十二（二〇一〇）年春、唐突な話が舞い込んできた。中国・大連市が東京交響楽団を招き、年内にコンサートを開きたいというのである。通常、オーケストラの公演予定は一年以上先まで決まっている。しかも、海外公演は経費の関係で、現地では複数回の演奏を行うのが当たり前である。

だが、その時点で東響の年内スケジュールは、七月に無理してやっと三日しか空いていなかった。移動時間やりハーサルを考えれば、公演は一回しかできない。さらに先方が提示してきた経費は、当方で見積もった金額の三分の二に足りなかった。これはとても不可能な話だと当初は思った。

ところが、双方のねばり強い交渉が実を結び、大連公演は決定したのである。

コンサートは七月二十七日の夜一回のみ、総勢百名のツアーである。心配した費用もすべて大連市の負担となった。

私がかつて東京交響楽団のスポンサーだった関係で、当時理事長の立場にあったので、自分からこのツアーに随行しようと思った。というのは、長野県から満蒙開拓団に加わった私の父親が、日中戦争の頃、中国に住んでいたことがあり、黒龍江省牡丹江の近くで病死し、そこに眠っているからである。父親が大連を訪れたかどうかは分からない。しかし、ハルピン、新京、大連と口の端に上ったような覚えがある。

初めての大連は活気があり、清潔で親しみやすいという印象だった。楽員諸君のリハーサルには立ち会ったが、時間の余裕があったので、旅行社に頼んで車とガイドを用意し、往復五時間ほどの旅順へ観光に出掛けた。子供の頃に口ずさんだ歌で名高い水師営を訪ねてみたかったのである。乃木希典まれすけ將軍とロシアのステッセル將軍との会見は、粗末な農家で行われたが、その家は昔のままに復元されていた。細長く何の変哲もない土壁の建物で、屋根にはペンペン草が生えていた。じつはここ二〇三高地と会見の家は、前年から一般開放され、ようやく日本からの観光が許されたのだという。

内部は薄暗く、とりたてて目にとまるものはない。ただ会見に使われた机が狭い部屋の大部分を占めていた。中国人の女性が説明してくれたが、この机は当時使ったものであるという。その机の表面に墨の文字が書かれていた。

「明治三十八年一月二日水師営に於ける第一師団衛生隊包帯所を以て、日露兩軍使旅順開城談判所に充てられたる際、この手術台上に白布を被いて卓子と為し、兩軍使相對して、条約を締結し

たるものなり」(片仮名は平仮名に変更し、句読点を追加)

農家は日露戦争中、野戦病院として使われており、乃木とステッセルが向き合った机はもともと手術台だったというのである。

そして、ふと文の末尾の文字を読んで、思わず「えっ」と息をのんだ。そこには「第一師団衛生隊長 横川徳郎識す」とあった。私の大叔父である。

わが家系の幻が現れたのであった。かつて、亡き父の叔父徳郎が軍医であったことだけは聞かされていたが、どこにいてどうなったのかは、まったく知らない。それを聞ける人は、この世にもう一人もいない。この出会いはどう考えても、単なる偶然とは思えない。

その夜、その衝撃を胸に置いて、大連での東響のコンサートに臨んだ。満席で札止めとなった会場は、フィナーレで盛り上がった。

ブラームスの交響曲も、シューベルトの未完成交響曲も、音楽監督指揮者ユベール・スターンの意気込みで、素晴らしい出来であった。そして、アンコールの二曲は、中国の人たちが馴染みのメロディーをアレンジしたもので、大変な感動を呼び、会場は拍手で総立ちとなった。こうしてただ一回だけの大連コンサートは、日中友好の橋渡しの一助としても、大成功を収めることができた。

父と大叔父が、私を大連に引き寄せたのではないか――。そんな不思議な思いを抱いた夏だった。

(初出「文藝春秋」二〇一〇年十二月号)

旅順その後——鷗外とつながる

旅順での思いがけない体験から帰国してとりかかったのは、横川徳郎がわが大叔父であるかどうかの確認である。生き証人は一人もいない。記録もなく、言い伝えによる伝説に近い。

旅順で会見に使われた件の手術台は二台残っていて、一台は日本にあると聞いていた。調べたところ、旧乃木邸で保管していることが分かった。乃木邸は現在、港区が管理しており、毎年一回だけ内部を公開している。

その年、平成二十二（二〇一〇）年九月十二日、公開された赤坂の乃木邸に出掛けた。目指す手術台は、立ち入りができない奥に置かれていた。じかには見えない。手術台に書かれたあの文字は、写真で展示されていた。その説明文で分かったことは、こちらが本物で、旅順のものはレプリカということである。

乃木邸では、徳郎大叔父の手がかりは得られなかった。ところが、思わぬところから糸口が開けた。娘のマンションの隣人で、日頃お世話になっている井上雅靖さんが、ネット検索による情報をごくださった。

藤川正数著『森鷗外と漢詩』の中に、横川徳郎（筆名唐陽）の名がしきりに現れる。鷗外は漢詩を能くし、軍医としては後輩にあたる横川徳郎に、詩作について指導助言を受けていたというのである。横川徳郎の漢詩集も存在し、古書店に一冊だけ在庫があった。急ぎ入手してみたが、

全文が漢字で齒が立たない。そこで、このときは大正大学で非常勤講師を務めていた赤羽良剛氏に頼んで、漢文詩を研究されている先生を探した。

平成二十五（二〇一三）年春、赤羽さんは大正大学の森晴彦先生に相談を申し上げ、明治大学大学院文学研究科博士課程の佐藤裕亮さんをご紹介くださった。佐藤さんは、そもそものこの経緯に興味を持ち、精力的に横川徳郎（唐陽）に関する資料収集に当たってくださいました。

私としては、とにかく日露戦争での乃木將軍と徳郎大叔父との関係を知りたいと思っていました。ところが、調査が進むうちに、森鷗外との関係が深いことが明らかになってきた。

私の祖父横川庸夫（筆名三松）が漢詩人であったことは、母親から聞かされていたし、村の中でも言い伝えられている。にもかかわらず、その弟である大叔父徳郎が、同じく漢詩を能くしていたとはまったく初耳である。しかも、医師としての職業のかたわら、残した作品は千編に及ぶという。

肝心の徳郎大叔父しゅうふの出自しゅつじについては、「信州諏訪郡四賀村にて出生」という明らかな記述が出てきた。そして、軍医としての経歴の中に「日清および日露戦争に従軍」という足跡も確認され、乃木將軍との接点もはっきりした。鷗外の日記（明治四十二年七月二日）の中に「横川徳郎の妻いち子歿す。弔詞を遣す」とあることも見つけた。

わが家の墓地は旧四賀村（現・諏訪市四賀神戸）の「頼重院」にある。じつは先祖代々の石碑の一角に一基別の墓石があり、かねてからこれは誰の碑で、なぜここにあるのかと思っていた。

私が上京してから墓守をお願いしている、隣家の神澤清さんに電話で碑の銘を確かめていただいた。それにはやはり「徳郎妻イチ子」と刻まれていたのである。

分家である徳郎大叔父の墓地は、どこか別にあるはず。にもかかわらず、連れ合いだけがわが墓地にあるのは異例ではないか。おそらくイチ子大叔母は、若くして亡くなった。そのためまだ自らの墓がなく、兄の家の墓に葬ったのではないかと思われる。

このようにして、幻のごときわが係累との出会いが、明らかとなったのである。

佐藤さんはさらに調査を続け、レポートをくださった。それは『彈雨をくぐる担架』と題する本の抜粋で、昭和九（一九三四）年九月十五日発行。著者は清水秀夫と記されている。

それによると著者は、奉天兵站病院長横川徳郎の部下として、一時期働いた。旧満州奉天で日露両軍入り乱れての戦いでの、おびただしい負傷者を受け入れる野戦病院の設置と、治療に従事していた。手記の一部には次のように記されている（一部意訳）。

病院で僕は朝から晩まで傷者の収容後送、治療も受け持ち、多忙な日を送っていたが、事務のことではよく横川病院長にお小言を頂戴した。

院長は陸軍部内で相当に名のある漢詩人で、雅号は唐陽山人といった。だから新米の僕が書いた文案などは気にいるはずがない。一々その字句を直される。暇なときなら畏まって承りもするが、この忙しい眼の回るようなときに、字句の説明をやられては気まずい思いをした。

その頃、第二軍司令部が奉天に入場していた。軍医部長は森軍医監でも知る文豪森鷗外博士であった。

横川院長があるとき、「ちよつと森閣下のところへ伺候してくる」と言つて出て行かれた。しばらくして帰つてこられたが、いつものような元気がない。余計なことを尋ねてご機嫌を損じてはと、僕は事務を執つていた。「君、今日は森閣下から一本やられたよ」「どうなさいました?」「実はね、奉天会戦のご感想をと尋ねしたら、いやくも軍服を身に着けた軍人が戦争の感想など言えるはずがない。強いて言うなら、悲惨の極みでも言わねばならない。そういう質問は慎んだがよからう」と言われたのには、閉口したよ」「それから奉天城の起源や故事来歴、皇陵の歴史などを詳しく質問せられて、全く閉口したよ」と述べられた。

僕は「そうでしたか」と返事をしたきりだった。内心では僕がふだん字句でお小言を頂戴するから、その仇討ちをして貰つたんだくらいに思った。それからは、いくらかお小言が止むかと思つたが、相変わらずであった。

四月二十二日、軍の参謀長から電報で、僕の転任を命じてきた。辞令の到着を待たずに、すぐ出発せよとのことだった。

横川院長も驚いたが、僕自身も驚いた。せつかく病院の事務にも慣れ、職員とも懇意になつたのに、命令ではすぐ出発せねばならない。二十四日の夕食時に、僕のための送別会が開かれた。横川院長をはじめ職員一同から、決別の辞が述べられた。

翌二十五日、僕はひとり旅立った。院長はじめ職員一同村外れまで送ってくれた。僕は支那馬車の上に乗って、後ろを振り返り振り返り、幾度も挨拶を交わした。

大叔父の足跡を検証するうちに、その人柄を彷彿ほうふつとする記録にも接し、あらためて、父祖の叫ぶ声を聞いたような気がしたのであった。

（初出『エッセイで綴るわが不思議人生』文藝春秋企画出版部、二〇一六年）

（よこかわ・ただし）

鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽
目次

序 父祖が呼び寄せた大連 ii 旅順その後——鷗外とつながる v 横川端

序 章 唐陽山人とは誰ぞ 1

第一章 明治漢詩の世界へ 13

近代日本の漢詩文を知るために 14

明治期における「詩」 21

第二章 横川唐陽の前半生 37

明治という時代に生まれて 38

横川塾と神戸学校 46

諏訪三俊——横川唐陽とその兄弟 56

第一高等中学校医学部に学ぶ 68

軍医となるためには——明治陸軍の軍医養成・補充について 79

日清戦争従軍とその後 84

第三章 日露戦争における横川唐陽 101

軍医たちの日露戦争 102

旅順開城の日の水師営包帯所 121

乃木大将の感状——奉天会戦における第一師団衛生隊 135

奉天の鷗外と唐陽 154

鷗外からの手紙 173

終章 唐陽の足跡を辿って 193

附論 217

藤川正数の鷗外漢詩研究をめぐって 218

横川唐陽の蔵書と蔵書印 225

あとがき 239

横川唐陽略年譜（稿） 241

あとがき

自由に研究できることのすばらしさが身にしみた三年間だった。

大学院生活はそれなりに忙しい。博士前期課程の学生は、入学して早々に進学や就職の心配をしなければならぬし、博士後期課程に入れば一本でも多く論文を書いて学術雑誌に投稿し、一日でも早く博士論文を完成させることが求められる。一方で、生活はなかなか安定しない。自分の専門領域から逸脱して、他のテーマに取り組んでいる時間はないのではないか。そのように心配してくださる人もいた。けれども私は、この機縁を大切にされたかつたし、何より横川唐陽の研究は「今、やらなければ」という思いが強かった。

その後、新しい発見があるたびに、横川端氏や赤羽良剛氏と食事を共にしつつ、情報や意見交換を行ってきた。地道に全国の図書館や資料館、古書肆へと足を運び、時には実地踏査などを行いながら資料を収集していくうちに、横川唐陽の歩んだ人生がしだいに明らかになっていく。本書の大部分は、その過程で執筆したいくつかのレポートが元になっている。

唐陽との距離が縮まるにつれ「ここから、私なりの研究を打ち立てていくことができるのではないか」という考えが、ふいに頭をよぎる。人物にこだわりの生きた時代に寄り添いながら、周辺の事柄にまで考察を及ぼしていくことで、従来の詩人伝とは異なる叙述の形をめざす。い

うほど簡単なことではないが、試してみる価値はあるように思われた。長きにわたった学生生活のおわりに、新たなテーマにめぐり逢えた喜びと、この研究を機縁として出会うことのできた人々に支えられ、本書はしだいに形をなしていく。気がつけば、もう三月も半ばを過ぎていた。

最後に、本書の執筆にあたり種々のご高配を賜りました、横川端氏、赤羽良剛氏、森晴彦氏、資料の閲覧・提供に快く応じて下さった内山公正氏をはじめとする関係者各位、刊行をご快諾いただいた論創社の森下紀夫氏に厚く御礼申し上げます。

平成二八年三月

佐藤 裕亮

横川唐陽略年譜（稿）

西暦（和暦）	年齢	関連事項
一八六八（慶応三）年	一歳	慶応三年一月二〇日（陽暦では一八六八年一月一四日にあたる）、横川唐陽（徳郎）、父横川庸義、母さきの次男として信州諏訪郡神戸村に生まれる
一八七三（明治六）年	七歳	三月、頼重院に神戸学校が設置される 六月、神戸村「官立学校設置伺」を提出「第三十八区第二十七番小学至善学校」設置を願出る
一八八六（明治一九）年	二〇歳	四月一〇日、中学校令公布
一八八七（明治二〇）年	二一歳	九月、高等中学校医学部設置 この頃より漢詩を森槐南に師事。同門に野口寧斎、落合東郭、関澤霞庵らがあった
一八九〇（明治二三）年	二四歳	九月、森槐南、漢詩結社「星社」を復興し盟主に推される 唐陽も槐南門下の一人としてこれに参加
一八九一（明治二四）年	二五歳	平田耕石と共に「鷗夢新誌」の補助員となる
一八九三（明治二六）年	二七歳	九月、第一高等中学校医学部の卒業試験を受ける
一八九四（明治二七）年	二八歳	五月、陸軍省医務局御用掛となる 八月、日清両国が宣戦布告（日清戦争）
一八九五（明治二八）年	二九歳	二月四日、三等軍医となる 四月一七日、日清講和条約（下関条約）締結 七月三日、台湾平定作戦に従軍するため字品を発ち台湾へ 七月八日、基隆兵站病院付 この頃、同門の野口寧斎「大森余光」を刊行、唐陽の漢詩も掲載される 九月八日、台北兵站病院付 九月一六日夜、唐陽、台北で森鷗外と面会

一九〇四（明治三七）年	三八歳	日露戦争勃発。第一師団衛生隊長として出征 八月一九日、二四日、第一次旅順総攻撃 九月一九日、第三軍旅順要塞への攻撃を再開 一〇月二六日、三一日、第二次旅順総攻撃
一九〇三（明治三六）年	三七歳	一月六日、次男新誕生 この頃、歩兵第一連隊付兼医務局御用掛として勤務 十一月二四日、長女マサ子誕生
一九〇二（明治三五）年	三六歳	この頃、東京衛戍病院付として勤務 三月、岸上操『明治二百五十家絶句』を刊行。唐陽・雲波の作品も掲載される 二月四日、唐陽、戦時衛生事蹟編纂委員を命ぜられる 七月、『游燕今体』を刊行
一九〇一（明治三四）年	三五歳	平田多七の長女イチ子と婚姻。二月八日婚姻届 二月二六日、長男官一誕生 六月一〇日、小倉にて森鷗外と面会 この頃、清国駐屯軍第一野戦病院付として勤務
一九〇〇（明治三三）年	三四歳	十一月二日、一等軍医となる
一八九九（明治三二）年	三三歳	この頃、歩兵第十八連隊付一等軍医職務心得として勤務 四月、槐南主催の『新詩綜』印行開始。二集以降、唐陽の作品たびたび掲載される
一八九八（明治三一）年	三二歳	この頃、歩兵第三連隊付として勤務
一八九七（明治三〇）年	三一歳	一〇月二五日、二等軍医となる
一八九六（明治二九）年	三〇歳	この頃、東京衛戍病院付として勤務 六月、明治三陸地震発生。唐丹村にて救災活動に従事

一九〇五（明治三八）年	三九歳	一月二日、水師營で旅順開城規約の調印が行われる 三月一日～五日、奉天会戦。第一師団衛生隊感状を受く 四月二二日、三等軍医正となる 四月二九日、野口寧斎死去、『百花欄』廃刊 九月五日、ポーツマス条約調印、日露戦争終結
一九〇六（明治三九）年	四〇歳	この頃、名古屋予備病院付兼騎兵第三連隊付として勤務
一九〇七（明治四〇）年	四一歳	陸軍省医務局、『明治二十七八年役陸軍衛生事蹟』刊行 七月二日、三男文誕生
一九〇八（明治四一）年	四二歳	歩兵第六十七連隊付兼浜松衛戍病院長として勤務
一九〇九（明治四二）年	四三歳	六月二九日、妻イチ死去 七月二日、鷗外、唐陽の妻イチ死去の報に接し、弔辞を贈る
一九一〇（明治四三）年	四四歳	権正薫の養女タイと結婚。六月一九日、婚姻届
一九一一（明治四四）年	四五歳	一月、第十一師団善通寺衛戍病院長となる 二月一日、二等軍医正となる。同月『論俳絶句』を刊行 三月七日、森槐南死去 八月七日、四男善誕生
一九一三（大正二）年	四七歳	五月一六日、五男揖五誕生
一九一五（大正四）年	四九歳	九月、『四国霊場奉納経』を刊行 一二月二三日、第七師団軍医部長となる
一九一六（大正五）年	五〇歳	四月、『揖五山館集』を刊行。鷗外、同書の内題を揮毫 一月一五日、一等軍医正となる
一九一七（大正六）年	五一歳	七月一〇日、六男忠美誕生
一九一八（大正七）年	五二歳	四月一日、予備役編入。退役後病院を開業

一九二二（大正一一）年	五六歳	火災に遭い、蒐集の典籍・書画、詩稿を失う 七月九日、森鷗外死去
一九二三（大正一二）年	五七歳	一〇月二〇日、『唐陽山人詩鈔』を刊行
一九二九（昭和四）年	六三歳	一二月一二日、横川唐陽死去。戒名徳信院忠鄰唐陽居士

本書で引用した文章の一部に、不適切な語句や表現がありますが、時代的背景や資料性を鑑み、あえて原文のままといたしました。

佐藤 裕亮（さとう・ゆうすけ）

1983年東京都練馬区生まれ。大正大学文学部史学科卒業、明治大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程修了、同博士後期課程単位取得退学。共著に『明日へ翔ぶ—人文社会学の新視点2—』（風間書房）、主要論文に「魏晋南北朝時代における一仏教僧の修道」、「南北朝隋唐時代、弘農華陰の仏教者たち」などがある。

鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽

2016年6月20日 初版第1刷印刷

2016年6月30日 初版第1刷発行

著者 佐藤裕亮

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル（〒010-0051）

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1533-6 ©2016 Yusuke Sato

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。